

Title	ウィグル文書笥記(その三)
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 7 p.43-p.53
Issue Date	1992-05
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/19186
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ウイグル文書^{さっき}割記 (その三)

森 安 孝 夫

*本稿は本誌『内陸アジア言語の研究』4 (1988), 1989, pp.51-76 ; 5 (1989), 1990, pp.69-89 に掲載された前々稿, 前稿に続くものである。従って, 文献目録・略号は, 新出のもの以外, 前々稿のpp.74-76, 前稿のpp.88-89に掲げたものを用いることにする。

8. yunglaqlıq/yonglaqlıq

主にウイグル文契約文書, 特に売買契約文書に頻出する用語 YWNKL(')X-LYX の読みと解釈については, これまで様々に議論されてきた。中でも山田信夫氏は, 売買契約文書の書式をまとめた論文に於いて「売主と動機」という項目を立て, まず

[B] manga, <売主名>-qa, yunglaqlıq <物件> kărgăk bolup
「われに, < >に, 用うべき < >が必要になりて」
という典型的な文例を掲げ, 後の< >内に入る物件として böz「棉布」, kümüş「銀」, čau「鈔」, qarčlıq (正しくは qarčlıq)「費用」, tawar「財物」
があることなどを説明した後で, 次のように言う。⁽¹⁾

なお, 定型化した yunglaqlıq という表現を, Radloff 氏は, 多く vollwertig と譯し,¹⁹⁾ 鈔(čau) のばあいには münzwert habende, geldwertig と譯し, 通貨として流通価値のあるという意味に解した。Malov 氏も同じく, ふつうの「動く」という意味のほかには²⁰⁾ употребительный「通用する」の譯を與え, 馮家昇氏も, 「通用的」と譯している。²¹⁾ しかし, 上の tawar などについても用いられているところからみて, これは, やはり,²²⁾ von Gabain 女史が, 漢語「用 yung」の轉用語で「用いる(gebrauchen)」の意味とした, その程度のことはとして解釋の方が妥當であろう。それにしても, この語をこのように用いるのは, 買賣文書に限ることで, 貸借契約文では, 同じような動機をのべる條があっても, また, böz や kümüş が借用の対象として記されても, 決してこの語は添加

(1) 山田, MS VI, pp. 38-40. なお, この箇所は英文論文 Yamada, MRDTB 23, pp. 90-92 に対応する。

されていない。一方、賣買文書では、上述の qarčliŋ の語を用いる USp 6 をのぞき例外はなく、さらに、この表現が用いられているものとしては、準賣買契約ともいふべき、年季奉公契約 3 點 (USp 14, 15; Ma•Ol 1) と賣養子の 1 點 (Ma•Ol 2) だけである。あくまで、賣買文書の書式として定型化したものといえる。

ガバイン女史が初め問題の語 YWNKL(′)XLYX の語根 YWNK を漢語の「用」とみなしたことは確かであるが、その後 *Acta Asiatica*, No. 6 (1964) に掲載された鈴木俊氏の英文論文に啓発されてこれを租庸調の「庸」‘Fron-dienst, Anwendung’⁽³⁾ とする説も発表しており、現時点でどのように考えているのかは分らない。⁽⁴⁾

次にこの語についてやや詳しい考察を行なったのは、ロンドンにあるヤールホト (トゥルファン盆地内) 出土のウイグル文土地売買契約文書 (Or. 8212-106 = Y. K. 0014) の訳註を行なったハミルトン氏である。⁽⁵⁾ 氏は主に敦煌より出土した唐宋時代の漢文同種文書中に現れる類似の語句「為(縁)闕少粮用」(S 3877 v₂&v₄ .. cf. *TTD*, III, No. 265 & No. 264), 「為縁闕少用度」(S 3877 v₇ .. cf. *TTD*, III, No. 269), 「伏縁家中用度所換, 欠闕正帛」(S 1946 .. cf. *TTD*, III, No. 286)などが、上掲のウイグル文書の定型句 [B] に対応することを指摘し、YWNKL(′)XLYX の語根 YWNK が漢語「用」に由来するとする説 (但し氏は YWNK を yung ではなく yong と再建する) をほぼ確定的なものとした。本稿「ウイグル文書割記 (その一)」の第 1 節で指摘した通り、主にトゥルファンから出土するウイグル文契約文書の書式の雛形は唐宋時代の漢文契約文書にあったのであるから、ハミルトン氏のやり方に間違いはなかったと言えよう。⁽⁶⁾

(2) ATG 旧版, p. 357.

(3) しかもその説を二度繰り返している: Gabain 1966, p. 138; Gabain 1973, pp. 60-61, 230.

(4) Gabain 1973 より後に出版された ATG 新版でも依然として旧版の「用」に由来するとする説明を残している。

(5) Hamilton 1969, pp. 36-37.

(6) 但しこの段階でハミルトン氏が比較の対象として売買文書のみならず貸借文書まで持ち出すのは時期尚早である。上掲の引用文に見るように、山田氏は yunglaqlıŋ を売買文書の特徴と主張しているからで、この点ハミルトン氏は山田説を誤解している。確かにこの YWNK-L(′)XLYX なる語は専ら売買文書に現れるのである。とはいえ全く例外がないわけではない。山田氏やハミルトン氏の当該論文の発表時点ではまだ気付かれていなかったが、ツィーメ氏が

ところでハミルトン氏は *yonglaqlıy* を ‘de consommation’ と訳し、一方ベルリン所蔵のムルトウク（トゥルファン盆地内）出土の土地売買契約文書の訳註を発表したツィーメ氏もこれに倣って ‘zur Konsumtion, zur Gebrauch’⁽⁷⁾ と訳した。その後1986年に出版されたハミルトン氏の *MOTH*（敦煌出土ウイグル文書集成）のグロッサリーでは *yonglaγ* (*yonglaq* ?) を ‘utilisation, consommation. [Dérivé en -°γ ou -°q du verbe *yongla-*, emprunté au chinois *yong* 用, 《utiliser》, dont la voyelle était plutôt -o- en moyen chinois.]’⁽⁸⁾ としていて多少の迷いが見られるが、YWNKL’XLYX 全体に対しては ‘relevant de utilisation, relatif à la consommation’⁽⁸⁾ としており、基本的な変化はない。また古トルコ語の辞書として双壁をなす *DTS* と *ED* ではそれぞれ *yunglaqlıy* = ‘пускаемый в расход, предназначенный для расхода (費用に供出する, 支出として予定された)’ (*DTS*, p. 281b) ならびに *yunglaγlıy* = Possessive Noun/Adjective from a Deverbal Noun from *yungla-*; ‘intended for use’ (*ED*, p. 952a) としている。

yung/yong-laq/laγ に関する議論はひとまず置き、ここで問題にしたいのは、YWNKL(‘)XLYX の最後の部分 -LYX についてである。即ち先学達が等しく +lıy と読んだ箇所である。

YWNKla- は語根 YWNK に Denominal Verb を形成する接尾辞の +la- (*ATG*, § 89; *ED*, p. xlv; *OTWF*, § 5.12 とくに p. 453) が付いたもので、意

ノ 1980年に再解読を発表した一貸借関係文書に ‘yonglaq-lıy čo krgäk bolup’ という表現があるからである (*USp* 87; Zieme 1980, pp. 232-233, Text G). čo はツィーメ氏の言う通り「鈔」即ち紙幣であろう。これまでに我々が把握している 総ての貸借関係文書のうちに問題の語が現れるのはこれ一点のみであり、しかも写真で見える限り原文は YWNKL’X-LYX ではなく Y’WKL’X-LYX と書かれているので、全く疑いがなくなったわけではないが、これは我々がハミルトン氏に倣って貸借文書も比較の対象としていこうとする上で貴重な例証である。敦煌出土の10世紀の漢文貸借文書中には「伏縁家中欠少正帛」、「為縁家内欠少正帛」などの類例がよく見られる (cf. *TTD*, III, Nos. 336-364)。また元代の様子を伝える『朴通事諺解』に引用された貸借契の文例には「今為缺錢使用」(上巻, 54葉)が、売買契の文例には「今為要錢使用」(下巻, 14葉)という表現が挙げられている (cf. 『老乞大諺解・朴通事諺解』台北, 中華民國67年, 聯經出版事業公司)。

(7) Zieme 1974, p. 300.

(8) Hamilton, *MOTH*, p. 263. さらに *MOTH*, No. 28 文書本文の翻訳に際しては ‘pour utilisation’ (p. 145) という表現をしている。

味は「用いる, 使用する, 消費する」等となる。その次に来る $-q$ ないし $-ɣ$ はいずれにせよ Deverbal Noun (ATG, §§ 127, 108; ED, p.xliv; OTWF, §§ 3.101 & 3.102) を形成するものである。山田・ハミルトン・ツィーメ氏等はこれにさらに Denominal Noun/Adjective 形成辞の $+liɣ$ が付いて問題の語が形成されたと考えたわけである。この $+l^oɣ/+l^og$ の機能は極めて多様であるが (cf. OTWF, § 2.91), 代表的なのは “mit etwas versehen, zu etwas gehörig” (ATG, §§ 53, 77), “possessing or having something” (GOT, p. 105), “muni de, appartenant à, rattaché à, originaire de, etc.” (CBBMP, p. 148) とされるように, 基礎になる名詞との所有・所属・帰属などの関係を表わすものである。そこで諸先学は, 問題の語を, それが現れる文脈を考慮しながら, 上記の如く「用うべき」, ‘de consommation; relevant de utilisation, relatif à la consommation’, ‘zur Konsumtion, zur Gebrauch’, ‘intended for use’ などと翻訳したのである。

これに対してエルダル氏は、『古トルコ語の語形成』と題する最新刊の中でこの語に言及し, YWNKL(‘)X の $-X$ が $-q$ か $-ɣ$ かは決定できないとするものの, YWNKL(‘)XLYX の末尾の $-LYX$ についてはこれを $+liq$ と読むべきであると明言するにいたった (OTWF, pp. 125, 178). この $+l^oq/+l^ok$ も同じく Denominal Noun/Adjective を形成する接尾辞であり, これまた様々な意味を, 基礎になる名詞に付加するが, その機能は $+l^oɣ/+l^og$ とは全く異なる。この $+l^oq/+l^ok$ に対するこれまでの代表的な見解としては, ガバイン女史が “Konkrete, Abstrakte” (ATG, § 54) と言い, ハミルトン氏が “suffixe nominal dénominatif exprimant la généralisation: il forme des noms abstraits ainsi que des noms d’endroit où telle chose se trouve.” (CBBMP, p. 148) とまとめたものがある。即ち, もとが具体的な名詞であればそれを抽象化あるいは一般化し, もとが抽象的な名詞であればそれを具体化するもののように考えられていたわけである。然るにエルダル氏は, これまで誤って $+l^oɣ/+l^og$ と読まれてきた語も含め, $+l^oq/+l^ok$ で終わ

るあらゆる語彙に徹底的分析を加えて、今までとは根本的に違う新説を唱えるに至ったのである (cf. OTWF, § 2. 77). 同氏によればこの $+l^{\circ}q/+l^{\circ}k$ の中心的な機能は、もとなる名詞に「(使用)目的, 目標, 予定, 方向性」(purpose, designation) の意味を付加するもので、英語の一語で言えば ‘for ~’ に対応するものである。そしてこの ‘for ~’ には、未来の時間を指示する用法も含め、「~用, ~分 (の, に); ~の為 (の, に), ~となる為 (の, に); ~を作る/置く/容れる為に用意された (ところ); ~に割当てられた, ~に予定された (もの, ところ)」などの広い意味がある。以下にエルダル氏の掲げる用例を列挙しよう。

üç yilliq 「三年間の (予定で)」, apamuluq 「永遠の為の」, ... künlük 「… 日分の (食料, 仕事など)」, nügülük 「如何なる目的で」, ädgü ögli teginkä qulluq barır biz 「我々は良心ある王子のもとへ奴隷となる (として仕える) 為に行く」, bāglik urı 「ベグに (なるよう) 予定された息子」, baṣṣilīq qarabaṣ 「園丁用の奴隷」, buṣilīq ärdinilär 「布施用の宝玉」, qanlīq böz 「ハン用 (着用する為) の棉布」, tonluq böz 「着物用 (作る為) の棉布」, iki tonluq böz 「二着分の棉布」, borluq 「ブドウ酒 (bor) を作る為に用意されたところ>ブドウ園」, čäčäklik 「花 (čäčäk) 園」, yimiṣlik 「果樹 (yimiṣ) 園」, tngrilik 「神 (tngri) 殿, 寺院」, aṣilīq 「金庫, 倉庫」, suvluq 「水の容器」, tärlīk 「汗とり」, aṣlīq 「台所」, qinlīq 「刑務所, 牢獄」, ögänliklär 「灌漑用施設」, qanlīq 「ハン国」, oṣulluq 「養子, 養子縁組」, ärlik 「男らしさ, 男の仕事」⁽⁹⁾

従って問題の語 YWNKL(′)X-līq についても “It refers to merchandise

(9) 以上はエルダル氏の挙げる例の一部にすぎない。また、この考えを応用すれば、これまで言語学的根拠もなくやや強引に ‘altı kiṣilīg sır čügi’ 「六人前の漆 (塗り) 箸」(Ot. Ry. 1414b, l. 10; 羽田・山田目録, p. 202; Haneda 1981, p. 71) と解釈されてきた kiṣilīg (但し原文は KYṢLYK のみ) が実は kiṣilik であり、それは kiṣi 「人」の派生語として正しく「~人分の」の意となることが明白になる。尚、エルダル氏によれば $+l^{\circ}q/+l^{\circ}k$ に抽象名詞を作る機能が現れるのは比較的遅く、しかも西方のカラハン朝に於いて顕著になるという (OTWF, pp. 126-127)。

which is *meant for* use, not such that is already in use.” (OTWF, p. 125) という結論が導き出されるのである。即ち問題の語は「使用する為の、消費する為の、消費用」と訳するのが正しいということになるのである。これは偶々、これまで YWNKL(')X-liγ と読まれながらも、主に文脈上から帰納されてきた解釈とほぼ一致するものではある。しかし、そこに到るプロセスはおおいに異なるのであり、今後はエルダル説こそが全面的に支持されなければならない。次にその強力な根拠となるものを示そう。

私は1989年に発表した論文「トルコ仏教の源流と古トルコ語 仏典の出現」(『史学雑誌』98-4, pp. 1-35) 以来、ウイグル文字の尻尾の長短による語末の -q/-γ の区別の有無について着目してきた。それはウイグル文字で書かれた文献全体は、書体——楷書体・半楷書体・(半草書体)・草書体——⁽¹⁰⁾のみならず書式・用語・語法・内容等々の総合的判断に基づけば、おおよその時代判定ができるという考えに立っての作業の一環であるが、それと並行して、契約文書を含む俗文書も、ほぼモンゴル時代に相当する「新しい」グループと、それより⁽¹¹⁾相対的に「古い」グループの二つに分けられるという主張を行ってきた。

そこで、この私の考えに沿って、YWNKL(')XLYX という語を持つ売買契約文書のうち相対的に「古い」と判断されるグループに属するものをピックアップ⁽¹²⁾してみる。

- | | | | | |
|--------|-----------|------|-----------------------|------|
| No. 1) | 016-1B-08 | Sa01 | Or. 8212-106 | ロンドン |
| No. 2) | 014-1B-06 | Sa02 | Ot. Ry. 1414a | 京都 |
| No. 3) | 017-1B-09 | Sa03 | T III M 205 (U 3908) | ベルリン |
| No. 4) | 001-1A-01 | Sa04 | T III M 205d (U 5241) | ベルリン |

(10) 森安「ウイグル語文献」, pp. 16, 39, 73.

(11) 前々稿「割記(その一)」, 第4節(売買担保文言); 前稿「割記(その二)」, 第5節(書体による時代判定)。さらに森安『マニ教史』, pp. 28, 33, 38, 46, 53-54, 55, 81, 87, 134, 135, 147, 172, 179-180, 186, 200 も参照せよ。

(12) 016-1B-08 などの分類番号は山田, & c. 「ウイグル文契約文書の総合的研究」で提示したものの, Sa01などは我々(小田・Zieme・梅村・森安)が出版準備中の山田信夫遺稿『ウイグル文契約文書集成(仮題)』に使用する新しい分類番号。Or. 8212-106 などは各所蔵機関による分類(所蔵)番号。

No. 5) 035-1B-27 Sa06 3 Kr. 39 サンクトペテルブルク

No. 6) 034-1B-26 Sa07 3 Kr. 41 サンクトペテルブルク

これらはいずれも「古い」グループに属するものであるから、当然「古い」書体、すなわち「半楷書体」で書かれている。しかし「半楷書体」で書かれているものの全てが尻尾の長短による語末の -q/-γ の区別を保持しているわけではない。別稿（森安「トルコ仏教の源流」 pp. 3-4）では、写真の発表されているウイグル文献全体につきこの尻尾の長短による語末の -q/-γ の区別の有無を調査した結果として、「①マニ教文献には基本的にこの区別がある。②仏教文献には基本的にこの区別がない。③俗文書（元代のものだけでなく、10世紀前後の敦煌蔵経洞出土のものも含む）にも基本的にこの区別はない。」と述べておいたが、それはウイグル文献全体を、特に③の場合はほとんどが草書体で書かれた俗文書全体を対象としたからであって、対象を「半楷書体」の俗文書に限れば状況はいささか違って来る。つまり、確かにその区別は消滅する傾向にあり、敦煌蔵経洞より出土した10世紀頃の「古い」ウイグル文書（cf. Hamilton, *MOTH*, Nos. 15-36）においてさえそうであるが、その敦煌蔵経洞出土文書も含めて、「半楷書体」の俗文書の中には明らかに尻尾の長短による語末の -q/-γ の区別を保持しているものが稀ながら見られるのである。例えば, *MOTH*, Nos. 15, 27, 31, etc.; Two Uyghur Administrative Orders のうちの⁽¹³⁾一つなどが挙げられよう。そこで、上で指摘した6点の売買契約文書について、その状況を改めて調査してみたところ、驚くべき結果が出た。

尻尾の長短による	（文字の機械的転写…
語末の -q/-γ の区別	Q: 尻尾が長い, X: 尻尾が短い

No. 1) Sa01 全く無し Y//KL///// (1. 2)

No. 2) Sa02 有るようである YWNKLX-LYQ (1. 2)

(13) L. Ju. Tuguševa, "Three Letters of Uighur Princes from the MS Collection of the Leningrad Section of the Institute of Oriental Studies." *AOH* 24-2, 1971, pp. 173-187, -5 pls.; G. Clauson, "Two Uyghur Administrative Orders." *UAJ* 45, 1973, pp. 213-222. 同じ内容の草稿の片方に -q/-γ の区別があり、片方にそれが無いというのは、注目に値する。

No. 3) Sa03 有るようである YWNKL'X-LYQ(1.2) SW β 'X-LYX(1.3)

No. 4) Sa04 明白に有る YWNKLX-LYQ(1.2) SW β 'X-LYX(1.20)

No. 5) Sa06 明白に有る YWNKL'X-LYQ(1.2)

No. 6) Sa07 有るようである YWNKL'X-LYQ(1.2)

つまりこれら6点のうちの5点、特に語末が -q で終わる語と - γ で終わる語との両方が頻出し、その末位形の違いが截然としていて紛れない No. 4 と No. 5 とから、問題の語が YWNKL(')X-li γ ではなく YWNKL(')X-liq であることが、決定的になるのである。実を言えば私もこれまで通説に従って問題の語を YWNKL(')X-li γ と信じていたために、契約文書中には尻尾の長短による語末の -q/- γ の区別のあるものは皆無と思い込んでいた。しかしエルダル氏の新説に接して再調査をしたところ、全く新しい視野が開けてきたのである。これによって、そのエルダル説が不動のものとなっただけでなく、逆に、書体をはじめとする諸特徴を組み合わせることで俗文書の時代判定を行なうことが可能であるとしてきた私の主張と方法が、いっそう補強される結果になったのである。ウイグル文契約文書は全てモンゴル時代(13—14世紀)のものであるとするクラーク氏らの説(cf. 前々稿, pp.52-53; 前稿, p.72)はもはや完全に過去のものとなったといっても過言ではなかろう。

9. 遺言状2件の作成地と年代

既に梅村氏が指摘しているように、現時点で我々が把握している俗文書中の家族・家産の継承および分割に関連する文書は6点ある。⁽¹⁵⁾ このうち遺言状とし

(14) 本文の一覧表に見るように、YWNKL(')X-LYQ が +liq であるのに対し、SW β 'X-LYX は +li γ である。SW β 'X (suvaq/suva γ) は「灌漑用の渠、用水路」であるから SW β 'X-li γ で「用水路を持つ、用水路のある、灌漑しうる」の意となり、文脈上もよく適合する。疑問が残るのは YWNKL(')X 並びに SW β 'X の -X の方である。これらはいずれも尻尾が短いのであるから、それを重視して - γ と読むべきか、それともこれは本来は -q であるが、その後さらに接尾辞 (-LYQ 並びに -LYX) が付いたための例外的な語中形とみるべきか、判断に苦しむ。これまで SW β 'X, SW β 'XLYX はほとんど suvaq, suvaql γ と再建され、YWNKL(')X については既に言及したようにハミルトン・エルダル両氏とも yunglaq か yunglay かで迷っているが、私はとりあえずは suva γ , suvaql γ , yunglayliq と再建する説を提案しておいて、後考を俟ちたい。

ての体裁をほぼ完全に備え、かつ文書自体の破損もないのは、トゥルファン盆地のチクティム出土でベルリンに所蔵される T II Čiqtim 5 (USp 78+82; U 5243) と、マンネルヘイム将来でヘルシンキに所蔵される Ramstedt, No. 2 の2点だけである。この2点はいずれも写真が発表され、その解読研究も何度かずつなされている。にもかかわらず、この両件の書き手(筆者人)が同一人物であることは、これまで誰にも気付かれなかったようである。しかし前者の23行目に “mān Qaysin ayītip bitidim” 「私 Qaysin が口述させて書いた」、後者の21行目に “mān Qaysin Tu ayīdip bitidim” 「私 Qaysin Tu が口述させて書いた」とあるのに注目して両文書を見直すと、極めてよく似た草書体(着目点: 語末の -L, -R, -N, -Y の形; -kā, mān, tip, bir の形; 分かち書きされる語中の -Z の後の空き具合; その他) であること、後期的特徴である t/d の交替や ñ の加点がいずれにも見られること、ayīr igkā tag- 「重い病気になる」、ičgārū ayīliq 「内庫」、ayīr qīyn-qa tag- 「重い罰につく」、üskintä 「～の面前にて」などの表現が一致するだけでなく書式全体もほぼ同じであることから、両者が同一人物の手によって書かれたとみてまず間違いない。Tu は人名の構成要素、恐らくは仏教僧侶の名前の中に頻出する Tutung (漢語の仏僧の称号「都統」からの借用語) の省略形であり、文書に表記される時には必ずしも必要でないものであるから、Qaysin と Qaysin Tu との差異は全く問題にならない。文書作成時の立会人(証人)の一人として両方に名が挙げられている Ikiči も恐らく同じ人物であろう。

ところで、俗文書の研究にとってその作成地と年代を決定することが重要であることは言を俟たない。梅村氏は、上に言及した両件の文書のうち、T II Čiqtim 5 についてはその作成年代をモンゴル時代と確定し、Ramstedt, No. 2

(15) 梅村「家産分割」で紹介された K 7716 と、その n. 3 (p. 436) に挙げられた5点。

(16) 梅村「違約罰」のテキスト VI と IX にあたる。そこには和訳の他、それまでの研究情報が載せられているので参照されたい。

(17) 最初にラムシュテット氏が Qaisin-tu と読んだのを、山田氏は Qawsin-tu、梅村氏は Qav-sin-tu としたが、ウイグル文字の Y と β は草書体では区別がつかない。

(18) cf. 山田, *MFLOU* 11, p. 170; 小田 1987, Nos. 16, 20, 24, 25, 29.

についてもモンゴル時代と推定する一方、作成地（出土地）については、それがチクティムであることの明らかな前者に対し、後者は漠然とトゥルフアン盆地とするにとどま⁽¹⁹⁾っている。しかし、両方の書き手が同一人物であることの判明した今、我々は後者についても、それがモンゴル時代のチクティムで作成されたものと断定して差し支えないであろう。そうであれば、その13—16行目の違約罰納官文言の項に

čamlasar-lar ičgärü ayılıq-qa bir altun yastuq qočo bägingä
 争議を起すならば 内 庫 に 一 金 錠 , 高昌のベグに
 bir at balıq bägingä bir ud birip ayır qıyn-qa tǵzün
 一 馬, 城市 の ベグに 一 牛を 与えて, 重い 罰 に つくべし。

とあるうちの「城市」とは、首邑・高昌城ではなくして、トゥルフアン盆地東辺にあるチクティム（唐の赤亭，宋の澤田，清の齊克騰木，現代の七克台）ということになり、これまでの疑問も氷解する。チクティムが balıq「城市」と呼ばれるだけの規模を持っていたことは今更言うまでもな⁽²⁰⁾かろう。さらにまた、その8—10行目に

bu küntä mınča Buqa Qulı-nıng örtü tay-qa qotı quum-qa
 本 日 以後 ブカ=クリ が 上は 山へ 下は 砂(漠)へ
 barsar öz köngül-inčä buyan birip yorızun
 行こうとも 自らの 意志のままに 福德を 捧げ 行くべし。

とあることから、トゥルフアン地方の方言で方角を言う場合、上方とは天山山脈のある北方を、下方とは砂漠の広がる南方を指すとする山田⁽²¹⁾説の正しさも再確認されるのである。

今後はこの2件の遺言状が同一時代、同一地域、同一社会に属するものであるという前提のもとで、様々な分析が加えられるべきであらう。⁽²²⁾

(19) 梅村「違約罰」, pp. 018, 025-026.

(20) トゥルフアン盆地内に存在した主要な城邑の数が唐代には22であり、それがマニ教ウイグル文書に見られる 'qočo uluṣ ikii otuz balıq'「高昌国二十二城」という表現に対応していること、その中に必ずチクティムが含まれることについては、森安「敦煌と西ウイグル王国」『東方学』74, 1987, p. 62 とそこに引用する諸論文を参照。

(21) 山田, *MS IV*, pp. 211-212; Yamada, *MRDTB* 23, p.76; Hamilton 1969, p. 45.

(22) さらに大胆な推測を許されるならば、梅村氏によって紹介された K 7716 も同一時代、同一

文献目録と略号 (ABC順)〔前々稿・前稿追加分〕

- ATG 旧版 A. von Gabain, *Alttürkische Grammatik*, (Porta Linguarum Orientalium XXIII), Leipzig 1950.
- ATG 新版 A. von Gabain, *Alttürkische Grammatik*, 3. Auflage, (Porta Linguarum Orientalium, Neue Serie XV), Wiesbaden 1974.
- CBBMP J. R. Hamilton, *Le conte bouddhique du bon et du mauvais prince en version ouïgoure*, (Mission Paul Pelliot, Documents conservés à la Bibliothèque Nationale, III), Paris 1971.
- Gabain 1966 A. von Gabain, "Japanische Orientalistik", *UJ* 38, 1966, pp. 136-141.
- Gabain 1973 A. von Gabain, *Das Leben im uigurischen Königreich von Qočo (850—1250)*, (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, Bd. 6), 2 vols., Wiesbaden 1973.
- GOT Talât Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*, (Uralic and Altaic Series, Vol. 69), Bloomington 1968.
- Haneda 1981 Akira Haneda, "Le thé et les baguettes", *JA* 269-1/2, pp. 69-75.
- 羽田・山田目録 羽田明&山田信夫「大谷探検隊将来ウイグル字資料目録」,『西域文化研究 第四 中央アジア古代語文獻』,京都 1961, pp. 171-206.
- 森安『マニ教史』 森安孝夫『ウイグル=マニ教史の研究』,『大阪大学文学部紀要』第 31・32巻合併号(別刷単行本),大阪 1991.
- 小田 1987 小田壽典「ウイグルの称号トゥットゥングとその周辺」,『東洋史研究』46-1, pp. 57-86.
- OTWF Marcel Erdal, *Old Turkic Word Formation. A Functional Approach to the Lexicon*, 2 vols., (Turcologica, Bd. 7), Wiesbaden 1991.
- TTD, III T. Yamamoto & O. Ikeda (eds.), *Tun-huang and Turfan Documents concerning Social and Economic History*, III: Contracts, Tokyo 1987.
- UJ *Ural-Altaische Jahrbücher*.
- 梅村「家産分割」 梅村 坦「ウイグル文家産分割文書の一例——中国歴史博物館所蔵 K 7716——」,『東アジア古文書の史的的研究』(唐代史研究会報告 7),東京 1990, pp. 420-446.

ノ 地域の社会に属するものであるかもしれない。なぜなら, K 7716 に見える人名のうちの Qan Toyin Tutung (l. 9) と Tükäl-ä (l. 10; 但し梅村氏は Tökäl Yä(?) としている) が T II Çiqtim 5 にも Qan Toyin (l. 22), Tükäl-ä (l. 18) として見えるからである。もちろんこれは偶然の一致ということも十分あり得るが, 梅村氏自身が K 7716 につき「仏教世界の色濃い反映がうかがえ, 結局この文書は十三—十四世紀ころのトゥルファン盆地で作成使用された可能性が高い」(梅村「家産分割」, p. 436)としており, その点同じく仏教的色彩の濃い Ramstedt, No.2 の方とよく符合する。